

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	小林 晴菜	指導教員 (主査)	浅野憲一専任講師

論文題目	レイプ神話が性暴力被害者のトラウマ反応および援助要請行動に与える影響の検討 —Male Rape Myth Scale (MRMS) 日本語版の作成を通じて—
------	--

### 本文概要

【問題】性暴力 (sexual violence) は、日本国内においても一定数存在している。(内閣府, 2020)。性暴力被害は、被害が潜在化しやすい一方で心身への影響が深刻であるとされており、心的外傷後ストレス障害 (以下 PTSD) 等の精神疾患発症のリスクが高いことが指摘されている (廣幡他, 2002; Kessler et al., 1995)。これらのリスクに対しては、被害後早期よりメンタルヘルス・サービスを利用することが重要であると考えられているが、実際に被害者がメンタル・ヘルスサービスなどの専門的支援を受けることは多くない (内閣府, 2020)。メンタル・ヘルスサービスを始め、必要に応じて直接他者に援助を求める行動である援助要請行動 (DePaulo, 1983) の阻害要因として、浅野 (2011) は、レイプ神話 (rape myth) の存在を上げている。レイプ神話は、被害後の PTSD といった遷延要因ともされている。(Dahl, 1989)。特に、男性が性暴力被害に遭った場合、恥や自責の念に加えて、被害中に勃起したなどの身体反応が起きたことに対して被害ではないと言われるのではと不安を抱くなど男性であるがゆえに相談することが難しい問題である。レイプ神話は、男性の性暴力被害においても存在しており (Chapleau et al., 2008)、先述した不安や懸念の背景にレイプ神話の影響が推測され、援助要請行動を阻害要因していることが考えられる。しかし、日本では、男性のレイプ神話の研究について、ほとんど行なわれておらず、心理尺度も存在しない。【目的】研究①Male Rape Myth Scale (MRMS) 日本語版作成。研究②望まない性的被害経験を持つ人々のトラウマ反応および援助要請行動へ与える諸要因の検討を行なった。【方法】リサーチ会社を通じて成人 1000 名 (男性 600 名, 女性 400 名,  $M=30.15$ ,  $SD=5.08$ ) から調査の回答を得た。研究②望まない性的被害経験があると回答した 189 名 (男性 67 名, 女性 122 名,  $M=30.31$ ,  $SD=4.99$ ) を分析対象とした。フェイスシート (年齢, 生まれの性別, 自認している性別, 望まない性的経験の有無, その種類, 相談行動の有無, 最初の相談先, 相談相手が最初にしてくれた行動, 相談しなかった理由①Male rape myth scale (MRMS) 日本語版②Acceptance of Modern Myth about Sexual Aggression Scale (AMMSA; Gerger et al., 2007) 日本語版 (今北他, 2019) ③M-H-F スケール (伊藤, 1978) ④平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) (鈴木, 1994) ⑤IES-R (Impact of Event Scale-Revised) 改訂出来事インパクト尺度日本語版 (Asukai et al., 2002) 【結果・考察】MRMS 日本語版の内的整合性, 信頼性, 妥当性が確認された。『援助要請行動へのレイプ神話受容度の影響』においては, MRMS および AMMSA とともに有意な差はみられず, 『トラウマ反応への諸要因が及ぼす影響』では, 女性においてのみ最もショックな被害経験の種類, 被害時年齢に影響みられた。この結果から, 被害を受けた人々はレイプ神話を不合理なものであると認識しているために総じて受容度が低かったことが影響している可能性がある。また, 被害者本人のレイプ神話の受容よりも, 被害者の周囲がレイプ神話を受容しているか否かなどが, 援助要請行動に直接の影響を与えることも考えられる。しかし, 本研究においては, 被害者本人の受容度のみを測定したため, 被害者の周囲の人々の認識がどのように影響をもつのかについて, 詳細に測定することが重要である。近年, 社会的な関心が高まりつつある性暴力被害だが, その後の援助要請行動及びトラウマ反応へのレイプ神話の影響について, 日本において明確に指摘する研究は少ない。引き続き, 性暴力被害者の被害後のメンタル・ヘルスサービスの利用を阻害, 抑制する要因を検討することは重要な社会的な課題であると考えられる。